

■研究・実践の課題（テーマ）

食育の視点からの国際理解教育学習プログラムの開発
ー青年海外協力隊の経験を生かした展開事例ー

■主任研究者 足立己幸

■共同研究者 河合あずさ

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】本研究の目的は、学校における国際理解教育で実施されている食に関する指導内容の現状を把握し、特に青年海外協力隊の経験を生かした「食」からの国際理解教育に焦点をあて、学習プログラムを開発し、その有効性を明らかにすることである。

【方法】栄養教諭が実践した愛知県A市立A中学校での事例を取り上げた。1~3年生の総合的な学習の時間を中心として実施した。

- (1) テーマ アフリカを知ろう
- (2) ねらい 日本とアフリカの食文化の比較を通して、広い視野をもち、異文化を理解し尊重する態度を養う
- (3) 学習計画 15時間完了
- (4) 活動例
 - ア アフリカの食生活について知ろう
 - イ 地球上の食料分配について考えよう
 - ウ アフリカの主食（とうもろこしの粉）と日本の主食（米）を味わおう
 - エ ボツワナ大使館訪問事前学習（ボツワナについての探究的な学習）
 - オ ボツワナ大使館訪問（現地スタッフとの交流）

実施したプログラムを食育と国際理解教育の目標に沿って整理し直すとともに、学習者である生徒の感想をまとめ、評価した。

【結果】プログラムは、実物を見て触れる体験を重視した構成とした。身近な「食」より、特に両国の主食を取り上げ対比させながら展開していくプログラムを組んだ。調理や試食を伴った活動を多く設定しており、生徒はいきいきと活動していた。活動の後に実施した感想からは、「アフリカの主食を初めて食べた。正直美味しくなかったけど、アフリカの人にとっては美味しいし、逆に私たちが美味しいと思っているみそ汁は臭いと言っていたと聞いて、びっくりした。」など、生徒たちが日本とアフリカの食文化等の違いに驚きながらも、「食」から他国に興味・関心をもち、お互いを認め合う姿勢をもつことができた様子が見えてきた。最終的には、大使館における現地の人との交流を通して、「ボツワナにいつか行ってみたい」「いろんな国のことを知りたい」など、国際社会に向けて視野をさらに広げることができた。

【考察】学校における食に関する指導のうち、食育の視点からは各地域の産物、食生活、食文化、これらの関係や歴史等を理解し、尊重する心をもつことについて取り上げた。一方、国際理解教育で求められる資質や能力には、広い視野をもち異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ることが挙げられる。この両者を、栄養教諭の開発途上国における青年海外協力隊の経験を生かしてつなげたことが、本実践の特徴である。国際理解教育というと、外国語活動を軸とした内容に偏重しがちな側面もあるが、本実践では実物に触れ、実体験や現地の人との交流を通し、生徒が「食」を通して主体的に気づきを得るような手立てを講じた。食育と国際理解教育両者の視点から切り込むことにより、中学生が自分と国際社会のつながりを考えるきっかけとなり、自分自身の食環境と対比させながら意欲的に学ぶことができることを確認した。また、調理実習という、見て、作って、食べて、実際に味わうという学校給食同様、「生きた教材」としての体験的な学習を取り入れた。体験学習の教育的意義を具体的に確認できた。調理実習について、国際理解教育からの意味付けについても大変有効であったと考える。また、食材入手にあたっては、大使館関係者と連携して行うことにより、食育のネットワーク構築の一部につながった。今回は実践の振り返りに留まり、十分にプログラムの有効性を検討するまでには至らなかったが、今後も「食」を通して主体的に気づきを得るような手立てを講じながら、栄養教諭として子どもたちにより寄り添った立場で、継続的な実践の積み重ねが重要であると考えている。